

自閉症児と知的障害児の全身麻酔下歯科治療後の行動変化

○石井 光治¹⁾、立川 義博²⁾

- 1) 佐賀整肢学園からつ医療福祉センター歯科
- 2) 佐賀整肢学園こども発達医療センター歯科

【緒言】佐賀整肢学園では、外来治療困難な障害児に対して、全身麻酔下での集中歯科治療を行っている。障害児の中には、全身麻酔での治療後に、多動、奇声、癇癢などの異常行動が減少し、明らかに落ち着いたという話を聞くことがある。そこで今回、全身麻酔下にて歯科治療を受けた自閉症児および自閉症を伴わない知的障害児の保護者を対象にアンケートを行い、治療後の行動変化を調べ、検討したので報告する。

【対象および方法】調査期間は平成18年11月から平成22年2月まで、対象は、全身麻酔下歯科治療実施時の年齢が12歳以下の障害児で、自閉症を持つ小児50名と自閉症を伴わない知的障害児28名である。全麻下治療後数週間から数ヵ月後に来院した患児の保護者に対して、アンケートを行った。質問は、1)全麻下治療後、家庭での様子は変わったか2)学校・幼稚園・保育園での様子は変わったか3)歯科での様子は変わったかの3つで、答えは「よくなった」、「悪くなった」、「変わらない」の3つから選んでもらった。両群間の比較は、Mann-Whitney's U testで行った。

【結果】「よくなった」と答えた人の割合は、自閉症児は家庭74%、学校52%、歯科64%、知的障害児では各々54%、22%、32%であり、「変わらない」と答えた人の割合は、自閉症児は家庭26%、学校48%、歯科30%、知的障害児では各々43%、78%、68%であった。また、両群間の比較では、学校、歯科での変化に有意差が認められた。

【考察】自閉症児では、知的障害児と比較して全身麻酔下での全顎のカリエス治療後、家庭、学校、歯科の各々の場面において「よくなった」と答えた人の割合が大きかった。このことから自閉症児はカリエスによって大きなストレスを受けていた可能性があることが示唆された。よって、自閉症児の心の安定を支援するために、歯科は重要な役割を担うと思われる。

Well-being歯科として、小児歯科ができること —長期来院者の健康サポートからみえたもの

○西本美恵子、藤中 麻岐、末吉 利江、
松野 美歌

にしもと小児歯科医院（福岡市）

【目的】歯科医院は、口腔の健康を通して来院者がwell-being（健やか）に暮らせるように、継続して支援できる場所である。来院者のwell-beingをサポートするために、定期健診を継続している理由、歯科医院にのぞむことなどの調査を行なった。

【対象と方法】小児期から10年以上定期健診継続来院者50名（男18名、女32名、現在年齢：12～32歳、平均継続年数16.6年）を対象に、自記式質問紙・インタビュー調査を行ない、質的データは定性的コード化、カテゴリー分類を行った。

【結果】

1. 定期健診を継続している理由：1位. むし歯や歯周病予防、2位. 歯・歯肉・口のチェック、3位. 歯のクリーニング、4位. 治療・処置が上手、5位. 小さい時からの記録が揃っているので安心、であった。
2. 定期健診を忘れた時に後押したもの：1位. 定期健診はがき、2位. 親のすすめや声かけ、3位. 歯科医院からの電話であった。
3. 歯・口が健康であるために歯科医院にのぞむこと：「技術・情報の提供」、「定期健診」、「熱意あるやさしいスタッフ」、「行きやすさ」等であった。
4. 元気に楽しく暮らすために必要なこと：「健康な歯がある」、「健康全般のアドバイスやチェック」、「定期健診」、「心のカウンセリング」等であった。
5. 気軽に長く来院できるために必要なこと：「歯科医院での支援」、「医院のよい雰囲気」、「優しいスタッフ」、「話を聞いてくれる」、「定期健診はがき」、「来院者の年齢層が高い」、「アメニティがよい」、「医院の近接性」等であった。

【考察・結論】

1. 来院者は歯・口の健康をきっかけに来院するが、来院を重ねていくと歯科医院は来院者の心身の健康、人生（well-being）に関わってくることが示唆された。
2. 来院者は歯科医院との長い関わりの中で、技術や情報の提供、スタッフの熱意や優しさ、医院の雰囲気などから総合的に、歯科医院を「安心できる場所」としてとらえている可能性が見出された。